九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

長崎歴史文化博物館所蔵 中島広足関連書目解題 (一)

吉良, 史明 九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/15082

出版情報:文獻探究. 46, pp.57-68, 2008-03-31. 文献探究の会

バージョン: 権利関係:

長崎歴史文化博物館所蔵 中島広足関連書目解題

序

国学者、 第六四号、 平成十六年)に紹介されている。 手で悉皆調査され、 りの村川家に伝わる資料は、 太一・井上敏幸の三氏領導のもと鎮西大社諏訪神社所蔵の広足自筆稿 蔵の広足関連資料が明らかにされた。そしてさらに、 富濱雄旧蔵資料は、 旧蔵書目録--四年)として結実した 『村川家蔵 中島広足資料目録』(熊本県立大学日本語日本文学科 の基礎的研究には、著しい進展が見られる。 旧蔵書の類が悉皆調査され、 中島廣足自筆稿本展目録』(諏訪神社・諏訪の杜文学館、 中島広足(寛政四年〈一七九二〉なかしまいのたり、寛政四年〈一七九二〉近世後期から末期の熊本、長崎、近世後期から 平成十八年三月)に報告され、 ―中島広足自筆本・手沢本類の宝庫―」(『参考書誌研究』 上田由紀美編「国立国会図書館所蔵 川平敏文・鈴木元・徳岡涼・ 熊本県立大学日本語日本文学科の諸氏の さらに、 若木太一・上野洋三・鈴木淳編 広足研究で著名な彌富氏旧 現在国立国会図書館蔵の彌 生—文久四年〈一八六四〉 大阪を舞台として活躍した 例えば、中島家ゆか 山崎健司・米谷隆史 上野洋三・若木 弥富破摩雄 平成 **|**| 諏

録―中島広足自筆本・手沢本類の宝庫―」にそもそも広足は、前掲「国立国会図書館所蔵 弥富破摩雄旧蔵書目

在である。 幕末にかけての国学の全国的な広がりを考える上で欠かせない存熊本の国学・和歌の発展に果たした役割は大きく、江戸後期からっては代表的な歌人・国学者の一人であった。とりわけ、長崎、天保以降の類題和歌集で常に歌数の高位を占めるなど、当時にあ

吉

良

史

明

の橘守部書簡にしての名声は、広足『橿園文集』(天保十年刊 二巻二冊)一集末附載しての名声は、広足『橿園文集』(天保十年刊 二巻二冊)一集末附載以降の類題和歌集に数多くの詠歌が入集した歌人である。その歌人とと指摘されるように、加納諸平編『類題鰒玉集』を始めとして天保期

....^{排2} 更御歌之御手際御秀絶、当今、江戸にはヶ斗之人、壱人も無御坐きてく\、橿園大人、学といひ、御風流と申し、不堪欽慕候。殊

期待される。 の微細な書入れを辿ることから、今後さらなる研究のなされることがにする上で注目される人物といえ、叙上の自筆稿本、ならびに手沢本と評されるごとくである。すなわち、近世後期歌壇史の実態を明らか



也編 本居大平添削本、広足の知友である青木永章筆写本、広足書入れ本等やみはおればから、広足関連資料は点数こそ僅かではあるが、広足自筆稿本、同館所蔵の広足関連資料は点数こそ僅かではあるが、広足自筆稿本、 が一部紹介されるものの、その全貌はいまだ明らかにされていない。 学部研究科・長崎県立長崎図書館、 いえる。 が収蔵されており、広足研究、 方、 『長崎県立長崎図書館蔵 そこで本稿は、 長崎歴史文化博物館蔵の広足関係資料は、若木太一・大庭卓 中島広足写真(浦勘太郎編『長崎県史料』〈明治四五年〉 同館所蔵の広足関連資料を調査し、ここに紹 ひいては近世後期国学研究の好資料と 善本・稀書展 平成十四年)に広足自筆稿本の類 解説』(長崎大学環境科 より転載)

介するものである。

する。あり、写本のみを記載した。なお、板本に関しては稿を改めて紹介あり、写本のみを記載した。なお、板本に関しては稿を改めて紹介本解題は、長崎歴史文化博物館所蔵の中島広足関連書目の解題で

近現代に補われたものについては、適当と判断する名を〔 〕内に補われたものに関しては、内題等によった。書名がないもの、また記した。なお、広足自筆と判断されるものは、その旨を記した。奥書、識語の九項目を基礎情報として、必要に応じて若干の情報を記載は、書名、整理番号、書写年時、書型、巻冊数、丁数、装丁、同館附載の整理番号にしたがって列挙した。

 記した。

蔵書印は、広足および門人のもののみを採録した。

「大保)、近世末期(弘化~慶応)、明治期、のごとくである。

「大田前期(正保~元禄)、近世中期(宝永~天明)、近世後期(寛政 写年時を記した。その際の判断基準は、近世初期(慶長~寛永)、 書写年時に関して、奥書・識語の類がない場合は私に大まかな書

唐人船梅ヶ崎修理場碇泊図 三―六一―二

船、左に千鳥を配す。近世末期成立。 ・・六×横○・八下隅に「蛭麿(印)」。印は「薑園」(朱文楕円印 縦一・六×横○・八下隅に「蛭麿(印)」。印は「薑園」(朱文楕円印 縦一・六×横○・八下隅に「蛭麿(印)」。印は「薑園」(朱文楕円印 縦一・六×横○・八米間に「蛭麿(印)」。印は「薑園」(米文橋円印 縦一・六×横○・五糎。表上に「唐人船梅ヶ崎修理場碇泊図」中島広足」と打付け書。落款、右紙に「唐人船梅ヶ崎修理場碇泊図」中島広足」と打付け書。落款、右紙に「唐人船梅ヶ崎修理場碇泊図」中島広足」の

崎南画三筆の一人と称された木下逸雲とも親交がある。摘されるごとく、広足は画人としても名を馳せていたようであり、長と併称されているが、画をもよくし、雅致のある作風であった」と指『日本古典文学大辞典』中島広足の項(中西啓執筆)に「村田春海





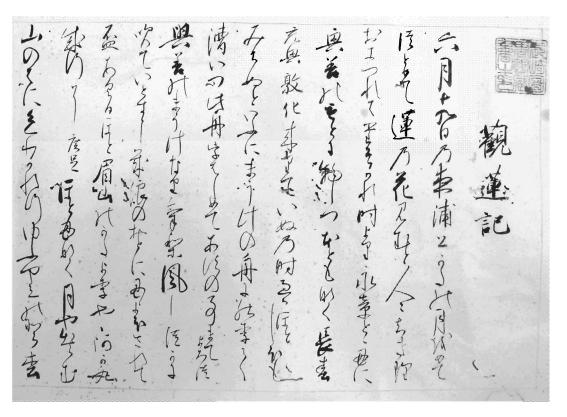
るす」。 配される。料紙は金砂子散らし。奥書は「天保八年六月 中島広足し配される。料紙は金砂子散らし。奥書は「天保八年六月 中島広足し記」と墨書。見返し(縦二九・九×横二六・四糎)は鼠色に銀砂子が六六九・九糎)一軸。題簽に「観蓮記」と墨書。冒頭に同じく「観蓮広足自筆本。天保八年(一八三七)成立。巻子本(縦二九・九×横

本書は、巻頭に

るほど、しほもみちぬといふに、まうけの舟にのりて漕いづ。とに物しつ。ほどもなく、長春・充興・敦化来りて、いぬの時過人々ちぎりおきつれば、たそがれ時より、永章とゝもに興善のも六月十九日の夜、浦上がたの月をめで、つとめて、蓮の花見むと

計六一首の和歌が記載される。 藤光輔とともに崎陽国学の三雄と称された青木永章のほかは伝未詳。八人で遊行へ赴いた。いずれも長崎における広足の知友か。広足、近田充興・道幸敦化の六人に道すがら島谷春弘・田親辰の二人を加え、田出かけた折のもの。中島広足・青木永章・高野興善・島谷長春・小と記されるように、天保八年六月十九日夜、浦上へ月、ならびに蓮見

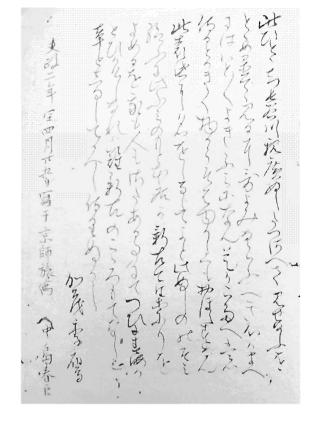
#1つる。 3000のでは、これでは、1000では、10



〔平春海歌論消息〕 一二一五

て、本居宣長の歌論を批判した『後の歌がたり』を著した。本書の親本であり、翌文政三年(一八二〇)正月、広足は同書に倣っ面会すべく鈴門の城戸千楯のもとを訪れた。その折に筆写したものが文政二年(一八一九)閏四月、江戸派の流れを汲む広足は、大平に

あるようなる学を明な年を手引る



二十七番歌合 一二—六七

ごとに判詞を加えたもの。判詞は広足自筆。 装丁は袋綴。長崎ゆかりの歌人の歌合二十七番に対して、広足が一対判者中島広足翁」と墨書。元表紙中央に「二十七番歌合」と墨書。 広足判。近世後期成立。大本(縦二七・二×横一九・六糎)一冊。

の計十八人であり、広足門人が一堂に会した歌合といえる。信敏、右、元興・秋郷・恒徳・貞雄・長成・敦化・有蔭・敦睦・一清歌人は、左、望古・常城・広端・重道・元修・佳秀・成則・久世・

東路紀行 一二一七

施されている。 題簽に「東路紀行 庫」(朱文方印 紀行」と朱書。奥書は「天保二年四月 中島広足」。装丁は袋綴。 広足著、 二巻一冊。 「坂本/蔵書」(朱文長方印 青木永章筆。 墨付四一丁。 縦三・六×横三・六糎) 中島広足著/青木永章書」と墨書。 近世後期写。大本 表紙は後補の白茶色布目紋様。 縦三・七×横二・六糎)、「青木/文 の印。 (縦二五・六×横一九・二 本文同筆の朱書入れが 冒頭に「東路 表紙左肩 初丁

を つまり

いとむねいたし。はかへりきて見るべきとおもふに、をさな子のしたひがほなるもはるかに月さしのぼりて、川なみにほのめくけしき、またいつかくべき事ありて、あかつきふかく白川のいほりを出。あその嶺、文政十まり三とせといふとしの九月廿五日、にはかに大江戸にゆ

わが旅のゆくへをおきてまさきくといのる心は神ぞしるらんとぞいはれける。師のやまひをいかならむとのみ、おもひやりて故郷をひとりたち出るありあけの月の光のこころぼそしや

心細い胸の内を吐露している。足であるが、出立に際していつまた熊本の地を踏むことができるかと

平成八年)に指摘される。神社の歌会を主催するに至ったことが『国書人名辞典』(岩波書店、神社の歌会を主催するに至ったことが『国書人名辞典』(岩波書店、なお、広足は千古の学統の養子であったが、辞して長崎に赴き諏訪

筑紫紀行 | 二一七一

所に見られる。 政十三年 足著/青木永章書」と墨書。 の白茶色布目紋様。 広足著、 中島広足」と墨書。 青木永章筆。 後掲『金海山詣記』との合写本。 図五面あり。 表紙左肩題簽に 近世後期写。 冒頭に「筑紫紀行」と朱書。 装丁は袋綴。本文同筆の朱書入れが随 「筑紫紀行 大本 (縦二五・八×横一九・一 墨付二十丁。 金海山詣記 奥書は「文 表紙は後補 中島広

に残る旧跡の数々を歴訪し、和学者広足らしく考察を巡らす。に参詣した時の紀行である。筑紫君磐井の墓を始めとして、北部九州本書は、門人の木谷忠英、藤村光鎮を伴い、熊本から太宰府天満宮

金海山詣記 一二—七一

行である。書は、西の高野山と言われる金海山大恩教寺釈迦院に参詣した折の紀墨付九丁。冒頭に「金海山詣記」と朱書。奥書なし。装丁は袋綴。本広足著、青木永章筆。近世後期写。前掲『筑紫紀行』との合写本。

れる。 な綴。末葉三二丁裏に「嘉永四年夏」の日付、勝敗、歌人名が記載さ 場広足翁判」と打付け書。背に「三十番歌合」とマジック書。装丁は 嶋広足翁判」と直に墨書。元表紙中央に「参拾番歌合」中 番歌合 中嶋広足翁判」と直に墨書。元表紙中央に「参拾 番歌合 中嶋広足翁判」と直に墨書。元表紙中央に「参拾 本歌合 中嶋広足翁判」と直に墨書。元表紙中央に「参拾 本歌合 中郷、表紙中央に「参拾

歌壇の一翼を担った人物である。田広端は、いずれも広足門人であり、青木永章・近藤光輔没後の長崎名を列ねた坂本秋郷・中島広行・森田速雄・島重道・蘆塚恒徳・高

宣告 夏草電 多年の子子のある

長歌の部立からなり、計八九首が収載される。
長歌の部立からなり、計八九首が収載される。
まになるものが概ねであるが、他筆と思しきものも垣間見られる。
生になる的箋一枚あり。朱・墨の書入れが見られる。朱筆は広足の手になる的箋一枚あり。朱・墨の書入れが見られる。朱筆は広足の手になるが箋一枚あり。朱・墨の書入れが見られる。朱筆は広足の手になるが、大平、後二七・二、大平、大平、各々の手になる。本草稿は春・夏・秋・冬・恋・雑・は広足、大平、各々の手になる。本草稿は春・夏・秋・冬・恋・雑・は広足、大平、各々の手になる。本草稿は春・夏・秋・冬・恋・雑・は広足、大平、各々の手になる。本草稿は春・夏・秋・冬・恋・雑・とは、大平、各々の書の書が、出ている。

ことが指摘される。 5 の書入れがあり、広足は文政十二年頃大平に歌文の添削を請うていた は「文政十二年十一月七日の夜までに時々とり出て見終りぬ」と大平 諏訪神社所蔵の広足『文詞』(文政十二年成立 一冊) 末葉三九丁裏に 朱書入れがあり、 間書損多く□□□(虫損)置□□ 初丁表右に「今日飛脚立候由朝の内永章よりしらせ来り俄に相 一つであろう。 永章を介して大平のもとに送られたことが明らかである。また、 俄なること故旅中在合の麁紙に相認候段御免可被下候」と広足の 欄上、傍に大平の批言・添削が記されていることか おそらく本歌稿もまた、 (虫損) □□□□□□□ 同年頃大平に呈した稿本 (朱線で抹

かりとなる大平の書入れが、本書十丁裏に次のように施されている。が変容したか否かを検討してきたが、長崎時代の歌風を検討する手が々の先行研究は、文政五年(一八二二)の長崎来訪以後、広足の歌風岡中正行「長崎の国学――中島広足を中心に――」を始めとする種

さま也。さてく、めづらしきことをも見聞くものかな。て也。狂歌の糟粕と云にてもなし。まづ、題が清国の詩などに云もあらず、寛政・文政の風にもわれいまだきかず、こたびはじめと也。契沖・長流の風体にもあらず、後柏原・逍遙院殿の風調に恋の歌をかやうによむことは、古今以後、新古今までにはなきこ

したことが看取されよう。たものであり、大平は同歌を古歌の風調にないもの、いわば新風と評たものであり、大平は同歌を古歌の風調にないもの、いわば新風と評と見しはつくばねのかゞひかひなきゆめぢなりけり」の歌に加えられ同書入れは「夢中握見手といふことを」と題した「たづさはりのぼる

れている。 したいる。 でいる。 でい。 でいる。 でいる。

な早しははてらなってとり大りテエンタラにできまれるととり感愛、カキッラルラを表をいまりたらととかりテエン

なお、巻頭歌「もえわたる小草のみどりはるべくとかすめる野べに、大政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と打付け書。元表紙中央に「草稿」上」と広足の手になる墨書。 に、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。 と、文政十二年頃、大平に添削を請うた歌稿の一つと思しい。

干の推敲を経て『橿園長歌集』に収載されている。にあたり、また「詠豊後国二浜之小石歌一首幷短歌」他長歌数首も若駒あさるなり」を始めとして、本書収載歌の一部は『橿園集』の草稿なお、巻頭部「もえれたる小草のみとりはる人へとかすめる野べに

> が見られる。 本葉四丁裏には「早苗初雁二章は清書申也おくり給へ 大平」の墨書 大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の は大平の手になる批言、質疑への返答。本草稿もまた文政十二年頃の が見られる。

の文言とともに、板本『橿園文集』に収載された。かゝれ候事感心いたし候だん~~後世は英才の人出くる事に御座候」本居大平書簡の「此節はじめてひろたり子の文章見申候さて~~よく本の書入れのごとく大平の一定の評価を得た本草稿は、近藤光輔宛

おいてきまするとうというないますがあるとうというできますがある。これできますがあるまたいとうというできますがある。これではないできますがある。これではないできませんがある。これではないできませんがある。

橿園随筆 一二—九一—四(所蔵者整理名—橿園随筆稿本)

墨書。 足筆の朱・墨書入れが見られる。「水乞鳥」「百千鳥」「喚子鳥」「稲 負鳥」について、考証を加えたもの。 上巻初より四丁板下書て送る」と朱書入れがあり、板本『橿園随筆』 (嘉永七年刊 二巻二冊) 成立の過程が垣間見られる。 ₩, 広足自筆稿本。 内題は広足の手で「橿園随筆 墨付八丁。 後補の白色厚紙表紙左肩に 近世末期成立。 大本 上巻」と墨書。 四丁表欄上には「子九月十一日 (縦二六・八×横一九・六糎) 「橿園随筆稿本」と直に 装丁は袋綴。 広

られたものである。 三木三鳥の伝授を批判しており、本草稿は同書をもとに晩年の頃認め草稿』(国会図書館蔵 写本一冊)を著して、堂上歌学の秘事とされる文化十二年(一八一五)十一月、若年の広足は『古今集三鳥三木弁

〔十五番歌合〕 渡辺文庫へ一二―四五 (所蔵者整理名―歌合)

肥前島原楽常寺の住職を務める傍ら、 \mathbb{H}_{\circ} である。 籠による歌合十五番に広足が判詞を書き加えたもの。 合」と墨書。 広足自筆本。 墨付十五丁半。 雲籠に関しては未詳 扉左肩に「判者 近世末期成立。 表紙は後補の白色唐草紋様。 大本 広足」と墨書。 (縦二六・〇×横 広足に歌文の教えを請うた人物 装丁は袋綴。 表紙左肩題簽に「歌 拙誠は安政 二九 拙誠、 四 糎 頃

[樺島浪風記] 三宅文庫ニーニ―五七

広足」、下巻「文政十一年九月」。欄上、傍らに本文同筆の朱・墨書入 風記」と朱書入れ。 糎) 二巻一冊。 「椛嶋浪風記 広足著、青木永章筆。近世後期写。 中島広足著/青木永章書」と墨書。 墨付二五丁。 装丁は袋綴。 表紙は後補の白色厚紙。 奥書は上巻「文政十一年八月 大本 (縦二六・七×横一九・〇 一丁表に 表紙左肩題簽に 「椛島浪 中島

子を主として書き綴った下巻からなる。る道すがら台風に遭い漂流した模様を描いた上巻、台風後の長崎の様本書は、文政十一年(一八二八)八月、長崎から故郷熊本へ帰帆す

れが施される。

か。
〔広足歌稿〕と同じく、永章を介して届けられた稿本を筆写したもの〔広足歌稿〕と同じく、永章を介して届けられた稿本を筆写したものているが、同書は本居大平筆写、手沢本と目される。あるいは、前掲なお、広足稿本の転写本が東京大学国文学研究室本居文庫に蔵され

花のしたぶし 三宅文庫ニーニ―七七

と一丁表に「坂本/蔵書」(朱文長方印 があり、広足門人の坂本秋郷旧蔵である。 の手になる墨書。装丁は袋綴。「安政二年二月 たぶし」と直に墨書。元麦紙中央に「橿園翁/花のしたぶし」と秋郷 広足著、 ₩. 墨付十四丁。 坂本秋郷筆。 後補の白色厚紙表紙中央に 近世末期写。 大本 縦三・七×横二・六糎) 縦 橿園 一五・三×横一八・三 「橿園翁 の奥書。 / 花のし 元表紙 の印

本書は、その冒頭に

りにて、ことしはしひておもひたちぬ。
りにて、ことしはしひておもひたちぬ。
りにて、ことしばしひておもひたちぬ。其家より谷ひとつのれにしたがひて、ふるごとまなびすなるを、其家より谷ひとつのれにしたがひて、ふるごとまなびすなるを、其家より谷ひとついにて、ことしばしひておもひたちぬ。其一山さくらのみのれにしたがひて、ふるごとまなびすなるを、其家より谷ひとついにしたがひて、かるごとまなびすなるを、其家より谷ひとついにしたがひて、かるごとまなびすなるを、其家より谷ひとついれにしたがひて、かるごとまなびすなるを、其家より谷ひとついれにしたがひておもひたちぬ。

浜町へと花見に出かけた折の紀行である。と記されるように、門人の松藤成保に招かれて現在の長崎県雲仙市小と記されるように、門人の松藤成保に招かれて現在の長崎県雲仙市小

奈良の吉野へ花見に出かけた折の著述であり、本書とは異なる。書館に蔵されているが、同書は安政四年(一八五七)に京都の嵐山、本書と同名の広足『花のしたぶし』(安政四年序写 五冊)が国会図



橿園翁七十賀之歌 古賀文庫シーニ―七二

て、門人、知友が広足の七十の賀を言祝いだもの。短歌七三首、長歌三首を収載。学統の養子である中島広行を始めとし央に同じく「橿園翁七十賀之歌」と題す。墨付十一丁。装丁は袋綴。の白色厚紙。表紙中央題簽に「橿園翁七十賀之歌」と墨書。元表紙中近世末期写。大本(縦二六・九×横一九・七糎)一冊。表紙は後補

府/唐坊長秋様 著述書目 七・六糎)、 五×横四・六糎) 近世末期写。 (切継紙一枚 田翁書簡 唐坊長秋宛田翁書簡 肥前長崎、 あり。 (切紙一 縦一五・八×横五七・四糎) 「田翁」 /中島田翁」と宛名書きした封筒 枚 縦 は広足の号。 (切継紙一枚 五·八×横一七·八糎)、 縦一六・二×横六 の三紙。「対馬国 縦縦 広足 一八

田翁等」と墨書した封筒 に 本書簡は長崎の郷土史研究家、 「中島広足書牘 安政三年十二月五日附 (縦二一・八×横八・四糎) 古賀十二郎の旧蔵であり、 /長崎之国学者、 に収められる。 現在、 号橿園、 表

橿園大人判 二十四番歌合 福田文庫テーニーハニ

匹丁。 守善、 糎) 一冊。 えたもの。 、春一巻十四」と墨書。さらに表紙左下に「大蔭写」と墨書。 広足判、 幸穂、 装丁は袋綴。 共紙表紙中央に「橿園大人判/二十四番歌合 中村大蔭筆。 広足門人である中村大蔭のほかは伝未詳 足海による冬、 表紙見返しに歌人名、 近世末期写。 春各々二十四番の歌合に広足が判詞を加 大本 勝敗が記載される。 (縦二七・〇×横) 冬一 巻十三 九・七 墨付二 大蔭、

> 1 二・六編嘉永四・七編同七年刊 七編十四冊。 初編文政十一・二編天保四・三編同七・四編同十二・ 五編弘化

以下引用文に関しては、 私に句読点、 濁点、 読み仮名を付した。

現在同館所蔵の広足関連資料の概ねは、 長崎県立長崎図書館郷土課旧蔵であ

3 2

岩波書店、 昭和五八年。

る。

4

大岡山書店、 昭和八年。

5

6

文化十二年

(二八一五)

頃から文政末年にかけての広足の名

7 西田秋実が筆写し、 同じく「文政二年閏四月廿五日写于京師旅寓 中島春臣_

の奥書をもつ『大平歌論消息』(近世末期写 一冊)が長崎図書館資料課に蔵

される。

8 しては、 国会図書館所蔵、 (『近世文藝』八一号、 拙稿「広足と宣長-文政三年正月成立、写本一冊。 平成十七年一月) - 『後の歌がたり』に見られる宣長批判の内実 を参照されたい なお、 広足歌論の変容に関

9 『日本文学論究』三四号、昭和四九年十一月

【参考文献】前掲『長崎県立長崎図書館蔵 善本・稀書展

[附記] 貴重な資料の掲載を許可された長崎歴史文化博物館に記して御礼申し上

げます。

ふみあき・本学大学院博士後期課程